

酔筆(9)

自分の顔と自分の画

新井 俊郎

自分の顔は自分には判らない。鏡の顔は本当の自分ではない。左右が反対になるからだ。写真はカメラを意識した顔だから、これれもほんとの自分ではない。自分の顔は皮肉なことに他人にしか判らない。他人のなかでも自分より境涯の高い他人にしか判らないのである。

造作なんぞはどうでもよいのだが眼をはなせない顔はをらぬか

これは何年も前にある賀詞交歓会の席で作った一首である。男にも女にも、これと思う顔がなかった。美人はいたが品のない顔だったり、昔の次官も貧相の見本みたいな顔をしていた。

自分の画も自分には判らない。自分の画が判るのにはどうしたらいいのか。私は短歌からのヒントで、一ヶ月間に描いたた画を菓子空箱に放りこんでおく。つぎの一ヶ月分は別の空箱に放りこむ。一年経ったら取出す。10枚に1枚も気に入った画はない。そのうちに月によって2枚3枚気に入った作品が出てくる。極端な例を言うと12年前に描いた『青山一丁目』とか13年前の『大根の花と連翹』とか4、5年前の『城ヶ崎』とか『マラッカにて』とかが、捨てようとしたスケッチ・ブックの中から出てきた。好いな、と思った。あとはスケッチ・ブックごと捨てた。

もう一つの方法は、他人に観てもらうことである。いちばん手厳しいのは細君である。ただちに、いい悪いを言いやがる。駄目だ、と言われた作でも私は捨てずに幾日かとっておく。一ヶ月もたつと自然勝敗が定まってくる。たいていは私の負けである。私の場合、溜まった作品を一挙に他人の眼にさらすのが個展である。これは細君以上に手きびしい。上にあげた捨てようとしたスケッチ・ブックから現れた古い画がいち早く売れていった時は、嬉しかった。自分の眼と他人の眼とが一致したからであった。